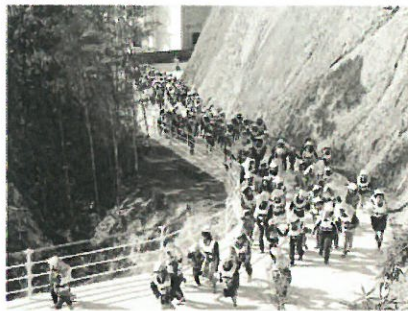


すくも
自主防災会だより
第4号

《大災害時代の防災意識》 エピソード

1997年の阪神淡路大震災以降に進められた「被害想定」を前提にした防災が、東日本大震災では「想定外」として無残に打ち砕かれましたが、そんな中であって、地震津波が起きたら、とにかく逃げることを第一の目標に掲げた単純明快な防災教育が大きな効果を発揮し、子供たちは襲いかかる想定外の脅威を見事に克服するという教育成果を世に示しました。そう「釜石の奇跡」です。岩手県釜石市では、1,300名に及ぶ死者行方不明者が出た中で、市内の小・中学校約3,000名が大津波を逃れ無事避難したのです。長年にわたり釜石市の防災・危機管理アドバイザーを務める片田教授は、「彼らに伝えたいのは非常に単純な事実です。『三陸海岸にはいざれ大津波が来る。いつ、どれくらい規模になるのかは分からない。そんなことは分からなくてもいい。自然の恵み豊かな地で暮らすならば、地震が起きればすぐ

津波を想起し、直ちに高いところに逃げることに繰り返し返しました。彼らはこれを実行したにすぎません。もつとも、日ごろの生活の中で、地震・津波の基礎知識の学習、避難場所や避難路の確認などは繰り返し返しましたが、これらのことは何も特別なことではありません。ただ、彼らが「地震即避難」いつでも逃げる覚悟と意識」を持ってきていたことこそがポイントだった」と、全国紙のインタビュー記事「オピニオン」で述懐しています。



ある市内の学校では、全員が自主避難を終えてから大津波警報を聞いているとのこと。も明らかにになっており、情報や指示のみに頼らず、いかに自主性をもって主動的に行動したかが伝わってきます。東

日本大震災の犠牲者は、逃げなかつたか、逃げ遅れたから亡くなった。これは厳然とした事実なのです。適時に正確な災害情報などがなくても、大津波から命を守ることは可能であることを、釜石の子供たちは、われわれに教えてくれました。自然災害において、常に適確な避難情報が得られると考えることは非現実的であることによく認識し、過剰な情報依存体質を戒めること、住民が見落としてはならない教訓だったと考えます。そもそも避難は住民自身の決断と行動に基づくもので、誰かがやってくれるものではないです。自らの命を行政に預けきつてはいけません。はならないことを改めてかみしめたいものです。



一方、激震による急傾斜地の崩落や様々な土砂災害に地域は分断孤立、「助けが来ない! そのときあなたは何?」多くの家屋が倒壊しそのうえ地震火災まで発生してしまい、最悪状況下に公的支援が全く期待できないことなども十分考慮しておかねばなりません。「そんなばかな」という人もいるかもしれませんが、公的支援には諸々限界があるのです。多くの住民を二度に助けることは、物理的にも不可能なことなのです。もちろん、市役所などを含め地域行政機関も被害を受け、その支援体制確立には一定の時間がかかります。その間に、市民が何もしなければ、犠牲者はどんどん増えるばかり・・・われわれにできることは、自分たちで家族の命を守り、近隣の住民で一致団結して倒壊家屋に埋まった人を助け、火災を消火して延焼を防ぐ等々のことです。これらの協力体制は、いざ災害が起こってから作れるものではありません。定期的な地域住民が、安全を高めるために集まり、何をすべきかを話し合い、役割分担しておくことが大切です。「助けられる人から助ける人へ、守られる人から守る人へ」、隣人に関心を持ち、決

※掲載写真は、全て成陽保育園・小学校合同避難訓練の様子です。



(宿毛市自主防災会連絡協議会 役員代表 河野典生)